

元人の書と書論

中 田 勇 次 郎

はじめに

中国の書論の歴史について、各時代にわたって考察を進めているが、ここでは元時代について論じてみたい。元時代は北方の蒙古民族が中国の領土を侵略して漢民族をその支配下におき、風俗言語習慣等にわたって蒙古民族に従わせようとして、大きな圧迫を加えていた。けれども、中国本来の漢文化は、これらの政治上の要路にあった異民族にとってはよく消化することはできず、結局は中国文化の上では漢民族に依存せざるを得ない情勢にあった。漢民族もっている学問芸術に関する文化は、この時代にあっても漢民族によって堅く持続されていたが、ただ、その間、元の帝王の中に、漢文化をよく理解するものもあり、蒙古族や色目人のなかにも同様のものが出ているので、漢文化が全然消滅してしまつたわけではない。しかし、漢人たちは、民族的な圧迫を受けているため、十分の伸張をなすとげることができず、多くは旧態を維持しようとする保守的な古典主義に終始するのが常であつたようである。このような情勢の中にあつて、中国の文芸の一分野をなす書画が、どのように行われ、また、どのように発展したかということは、注目されてよいことである。ここではもっぱら書を取りあげるわけであるが、元時代の書というものの実態がどのようなものであるか、また、どのように進展していったかを改めて考えてみることにし、さらに、それを裏づける元代の書論についても、その著述を通して追究してみたいとおもう。

元 人 の 書

元時代にもっとも近いころの人で、元人の書人系譜を論じているものがある。元末明初の解縉（一三六九—一四二五）の「春雨雜述」の中

に、書学伝授と題してこのことを述べている。これには、まず、古く漢の蔡邕にはじまって、魏晋南北朝の諸家をへて、唐五代に及び、さらに北宋南宋から元代の人々に至っている。唐代までの書道伝授の系譜は他にも見られないことはないが、これは宋元にまで及んでいる点で、注目される。その宋以後のものを見るに、北宋では、李建中（西台）、周越（繕部）、が名を知られ、蘇舜欽、薛紹彭がこれに継ぐとし、南宋では、米友仁が家法（父米芾の法）を伝えて世に盛行し、金では米芾の甥にあたる王庭均とその子澹游（王曼慶、字は禧伯、号澹游）と張天錫をかかざる。元代では、はじめに金の張天錫を承けた鮮于枢（伯機）、つぎに趙孟頫、康里夔々（子山）をあげる。趙ははじめ張即之を学び、米芾から出て、天資は英邁、積学功深く、尽く前人を掩い、超えて魏晋に入る、当時、翕然として之を師とす、と称してこれを称賛し、趙の書を承けるものに、康里夔々のほか、楊載（仲弘）、范椈（文白公）、趙雍（仲穆、趙の子）をあげ、康里夔々はその奇偉を得、楊載はその雅健を得、范椈はその灑落を得、趙雍はその純和を得たとしている。そのほか趙の門流として取りあげることができるのは、ただ桐江の俞和（子中）が書をもって鳴るのみである。明の洪武の初ころには、後進のものが、なおこれを見ることができた、という。さらにまた、康里夔々が、南台に在ったとき、（南台は御史台をいうが、この官に在ったときは不明）危素（太僕）、饒介がその伝授を得た。危素はこれを宋璩（仲珩）、杜環（叔循）詹希元（孟举）に教えた。詹希元は若いころ子山の門に業を受けた。

饒介は宋克（仲温）に教えた。元の至正の初、揭傒斯（文安公）は楷法で名を得、その子泂（伯防）と、その孫枢（平仲）に伝えた。枢は洪武中に仕えて中書舍人となり、宋璩、杜環と声名が相埒ひたしかつた、という。

鮮于枢を第一に述べているのは、金の張天錫から出ているためもあるが、趙孟頫よりも早くに書名があったためではないかと思われる。趙の門下に、康里夔々、楊載、范椈、趙雍をあげているのは、見識のある所であろう。そのほかにとくに俞和をあげているのは、俞和の書が趙の奥義を得ていることを示している。たしかに俞和というのは、趙の書を承けた中でも有数のものと言えるようである。俞の書に趙の落款を入れたら趙の書との見分けがつかなかったという。康里子山から危素と饒介が出て、危素から、明初の宋璩、杜環、詹孟举が出た。孟举は若いとき子山から学んでいることは、子山の実力の大きさが想像される。揭傒斯の子孫の書が明に及んでいることも、元から明へのつながりをよく知ることができるといえる。

およそ伝授形式の書が行われるのは、伝統派の書が典型的な美しさの極致に至ると、そこでその極致に到達するがために、師授の形式でその

書道としての修練を行い、その技法を秘伝として口授することが行われる。唐代の後半期には、このような伝授書道が多く流行し、その伝授書のため今もなお文献として多く伝わっている。元は書において保守的な時代であり、同じように、伝統的な書を伝授形式によって師授することが多く行われている。その書論を見ても、後述のとおり、鄭杓の「衍極」にも書道伝授のことを系譜として図示している。このほか、李溥光にしても陳繹曾にしても、みなこれと類を同じくする伝統的な書法を守っていることから考えて、解縉の説も、元人の書論の伝統性をうけついでたものであるということが考えられる。師授の方法は明らかではないが多くのものはおそらく師匠が弟子に口授したものを筆記して著述として残されたのではないか。

もう一つの元代に近い著書は、陶宗儀の「書史会要」である。陶宗儀は、あざなは九成といい、南村と号した。浙江黄巖の人。元末に兵乱を避けて松江の南邨に寓居したので、これを号とした。著述にはよく知られたものに「輟耕録」がある。「書史会要」は九卷補遺一卷より成り、洪武丙辰（九年一三七六）の自序のほか、宋濂等の序、鄭真（字は千之、号榮陽外史、鄞県の人）の後序がある。内容は主として歴代の書人の小伝を記したもので、この中に元代の書人を多くのせているのは、時代も近いので参考になる。ここでその書人の概数を掲げる。

帝王、皇族 英宗、文宗、庚申帝、愛猷識理達臘の四人

漢人 趙孟頫以下陶宗暹に至る百七十二人

蒙古人ならびに色目人三十二人付漢人一人

閩秀 管夫人以下柯氏に至る四人

道家 天師張与材以下周蘭雪に至る十一人

釈家 帝師八思巴、釈溥光以下釈溥圓に至る十五人

計二百三十九家を数えることができる。別にまた補遺として、漢人 劉秉忠以下許有壬に至る三十三人、蒙古人色目人 夾谷希顔より哈刺に至る四人、閩秀 趙夫人段氏劉氏三人、釈家 釈夷簡より釈永芳に至る六人、計四十六人がある。

右はかなり多くの書人を集めているということが出来る。帝王の次ぎに、第一に趙孟頫をおいていることは、もちろんその声名と書人としての評価の高いことを示している。知名の士は漢民族のものを先に多くかけ、後には蒙古人および康里、畏吾その他の異民族のいわゆる色目人

のものが多く収められているのは、これらの間にも漢文化の行きわたっていたことが了解される。小伝のちにのせた巴思八の条には、その国で梵文から採った国字の巴思八文字の字母四十三を图示しているのはめずらしい。そのほか道家釈家にも及んでいる。釈家には、日本の禅僧の墨蹟の中に伝えられている、季潭宗渤、楚石梵琦、見心来復などの名が見えている。元代になると禅宗の僧侶が趙子昂などを学んで、書をよくし、書人として名があらわれていたものがあつたことがこれでわかる。その数は多くないが、少数でも禅僧の名があげられていることは注目すべきである。そこで、ここに収めた書人たちが、どのような書を学んでいるかを概括的にとらえてみる。宋末元初にあたって、劉秉忠、王磐、姚枢、許衡、郝経など、書にすぐれた人々がまずはじめにあつたけれども、何といても趙孟頫があらわれてこの時代を風靡した大家となつたことは認めなければならぬ。従つて趙が出てのちは、これについて学んだものがかなりある。趙と並んで名のあつたのが鮮于樞であり、また鮮于について学んでいるものがある。辺武などはその一人である。魏晉を学ぶものは概してもっとも多く、鍾繇や二王を目標とするもの、晋人の風度を得たものなどがあつて、この時代の古典主義の主流をなしている。この時代の知名の士の大半はこれに属する。書の基本の点画を学んで大成する風は、一般に行われていたようで、陳繹曾や李雪庵の称した学書の基本的な方法は学習の上にも必須のものであつたであろう。唐楷を好むものが多く、虞世南、歐陽詢の書風の流行は、次の明初にまで大きく反映を及ぼしている。大字をよくするものが随所に見られるのも、陳李の学書に大字を取っている傾向と一致している。唐の李邕を学ぶ人があるのは、趙の流れにそうものと見られる。草書になると、もっぱら趙の草書を学ぶものがあり（例えば章德懋）、また早くに鮮于樞のような草書の名家があり、そのあとを承けるものがあり、康里子山もまた草書において一流をなしている。草書には普通の草体ではなく、章草の体が喜ばれることも、この時代の一特色であり、この傾向は明初にまでも及んでいる。

唐の革新派の顔真卿や、張旭、懷素の狂草体については、顔を学ぶものは宋末元初の人をのぞいては、ほとんどなく、これは趙風の古典派の人は顔を取らないからで、時代の性格をよく現している。張素の狂草を学んだものには晩くは饒介などのようなものも出ているが、一般にはやはり古典の古風の草体を学ぶのが大半を占めている。楷書ばかりでなく、古い篆書や隸書をよくする人が相当に多く、篆隸の専門的な学者も出ていることは、この時代の古典性をよく示している。およそ概観すると、このような情況で、前代の北宋に出た、蘇軾、黃庭堅、米芾のような大きく自由な豪放な氣象をもつた書は、この時代にはほとんど学ぶ人もなく、あつてもわずかに一二名にとどまり、多くの人は晋唐の古典に終

始し、典型的な楷行草から、さらに篆隸を究めた。要するに正統の書の基本に立って書を作る人が多いというのが、この時代の全般的な風気となっている。

大勢の上からは、この時代の特色としては、古典性をとらえるよりほかはなく、この風潮は、次の明代の中期のころまで持続してゆく。文徵明、祝允明はこのよき継承者である。文は別に黄山谷を学ぶ、祝は張、素の狂草を好んだといわれるが、実際はともに魏晋を主とする古典派である。明の後半期になって、董其昌が出て、宋の米芾に傾倒し、反趙子昂の旗幟を掲げて、ここではじめて元の趙風が一転するようになる。ただ、元代の末葉にあらわれた文芸家のなかに、新しい空気が認められる。呉鎮（梅花道人）の草書や、倪瓚の楷書を見ると、これはもはや古典派の書ではない。また、楊維禎の書は、章草風な草書に新しい奇逸さがあり、饒介の狂草は、まさに懷素の余韻を呈している。文人たちの逸気から生ずる芸術が、のちにさらに逸格的なものに走ってゆくのは明の後半期から以後であるが、その源流は元末の文人に求められる。その点から言えば、元末の文人の書の中に、いくらかでも反古典的な要素が見られることは、意義のあることと言うことができよう。

元人の書を鑑賞した例は、明代の集帖に見られる。文徵明の家で刻した「停雲館法帖」の巻第八、九に元名人書を収めているのがそれである。

趙孟頫	尺牘、与中峰明本	九札	行書
〃	臨王羲之尺牘	服食帖	草書
〃	臨洛神賦十三行		小楷
〃	小楷千字文		
〃	常清静經		小楷
〃	尺牘	三札	行、草
趙麟（彦徵、孟頫の孫）	詩牘		楷書
鄧文原	尺牘二札		行草
鮮于樞	尺牘一札		草書

元人の書と書論

鮮于去矜（鮮于枢の子）	李白詩	草書
胡長孺	尺牘一札	行書
虞集	尺牘一札	行楷
揭傒斯	送劉衷序	小楷
揭泂（傒斯の子）	漢晋印譜序	小楷
康里巉々	尺牘二札	行草
周馳	尺牘一札	行書
袁楠	尺牘一札	行書
饒介	尺牘二	行草
陳基	尺牘一、呈書一	行書、小楷
張雨	中庭古栢詩	行書
王蒙	姑蘇錢塘懷古詩	楷書
倪瓚	姑蘇錢塘懷古詩並跋	楷書

古典派の人々は書の鑑賞をするのに、古人の尺牘を主とする。二王の書の大半は尺牘である。その風習は唐代にまで及び、宋代になると、詩巻に大書する形式で、尺牘よりも詩を重んじて、しかも横巻に大書するようになる。元人はたいていは古典主義であり、それを承けて、後世も元人の書は尺牘を主とし、詩文も大書することなく、尺牘と同様の大きさの文字で書くので、ここに収められたものにも大書したものは一つもない。趙孟頫はとくに小楷をよくしたので、その風を承けてこの時代の楷書をかく人々も、晋唐風の楷書をよくする人が多い。この帖に収められた小楷もみなそのたぐいである。元人が楷書をよく学んだことは、趙の影響が大きいであろうが、一般的に古典調の書が行われたため、楷書においてもすぐれた書人が多かったと思われる。この法帖にも趙をはじめとする小楷の名品が見られる。饒介は懷素風の草書をかいた人であるがここでは尺牘を取り、古典派と変りはない。倪雲林の楷書は、やや古拙な風をなすが普通であるが、ここではやや勁媚に見える。この帖は

元人の書の名家を選んでいる点では、文氏の鑑賞の古典性がよく出ている。

明代には、書画の著録があらわされて、鑑賞にも、原文の釈文ののちに諸名家の題跋を加え、評語を添えたものができている。書の商品も、単に名士の書というだけにとどまらず、書としてその美しさを鑑賞することのできるものを選ぶ。従来の尺牘のみに限ることなく、詩冊などもあり、古法書の臨模の作なども雑じて多様なすがたを呈する。著録には「鉄網珊瑚」、「珊瑚木難」、「書画跋々」、「郁氏書画題跋記」、「真蹟日録」などがある。ここでは汪珂玉の「珊瑚網」を例にとって見ることにする。

その巻八、九、十、十一、十二は元人の法書を収めている。

巻八

趙孟頫

葵蘭亭跋、臨蘭亭卷 臨蘭亭二卷諸跋、真草千文、四体千文、臨智永千文卷、臨張旭京中帖、小楷麻姑仙壇、子仲穆（趙雍）書讀書城南、及書司馬溫公勸学、共三帖卷、楷書道德經二卷、小楷高上大洞玉經二卷、金碧古文龍虎妙經、洛神賦三卷諸跋、行書歸去來辭 勉学賦并序、光福重建塔記并篆、楷言湖州妙嚴寺碑記、中峰懷浄土詩後系譜 春寒詩卷

巻九

趙孟頫 諸賢天冠山題詠、行書詩詞、雜書八則、覆南谷二帖、簡覺軒路教諸蹟、答子誠劄、行書坡仙煙江疊嶂詩跋、書陶詩付陸宅之文 鮮于枢 書詞子、草書唐絶真蹟

巻十

虞集 誅蚊賦 古劍諸歌墨蹟 詩卷真蹟 鄧文原 臨急就章諸跋

郭天錫 手録詩文雜記 手鈔諸賢遺稿

貫雲石 詩卷真蹟

俞和（紫芝） 楷書悟真篇跋

吾丘衍 古文篆韻二帙

元人の書と書論

柯九思 石屏記

饒介 幻住詩蹟

王德璉(雲庵) 香奩八詠卷

顧祿(謹中) 詩卷

黃公望(子久) 与寧極路教手札

王蒙(叔明) 谿南醉婦詩

卷十一

倪瓚(元鎮) 醉歌行墨蹟、雲林詩帖、贈陳惟寅詩卷、詩草遺蹟、詩余手蹟

莫昌(南屏) 詩翰

楊維禎(廉夫) 寄倪迂詩蹟、小遊仙詩

張雨(伯雨) 草書單条、与袁子英詩帖、雜詩冊、自題画像贊

(方寸鉄志并詩歌銘頌跋(楊維禎等)

元名公為朱鍊師七跋(范椁等)

卷十二

元天目山禪師劉順法語

中峯明本禪師書 九字梅花詠

楚石梵琦 詩翰卷

元名公翰墨

元賢疏劄

元人竹深処賦并叙諸詩及跋

宋代以来、書画卷を鑑賞するには、その巻尾に題跋を付け加える方法が行われるようになった。題跋には自跋があり、他家の跋がある。自跋の場合、詩篇などを横巻に大書して、その末尾に、原文と同じくらいの大きさで自跋をかくことがある。黄山谷の詩巻にはとくにそれがいちじるしい。その伏波神祠詩巻などがそれである。また、蘇東坡の黄州寒食詩巻ののちに加えた山谷の跋尾も、東坡の本文に劣らぬ豪放な書風をもって大書している。南宋になってからも、西塞漁社図巻の范成大の跋などは、文字も大きく気宇も雄大であり、まさに北宋の士大夫にも劣らぬものがある。宋人は題跋をこのみ、一つの書画卷に多くの人々が題跋を記している例がある。原本の筆者の子孫が題跋をかくことがあり、一門の人々、一派の人々などが合筆して題跋を記す例などもあり、その評論の内容も多様で、深く原本を味到している。元代もそのあとを受けて、鑑賞にかけてはかならずしも衰微したとは言えない。また、書画の收藏家も宋末から元代におよんで、周密、喬篋成、郭天錫など、その数は少ないとは言えない。元人の題跋は、量の上では、あるいは宋人を凌ぐことはできないかもしれないが、よく宋人を承けついでいると言うことができよう。

趙孟頫は、独孤僧本の定武蘭亭序を、北行中の画舫のうちにあつて心ゆくまで展玩し、帖尾に十三跋をしたためたことはもつとも有名である。東京国立博物館蔵本がある。「珊瑚網」の巻八のはじめにも、この独孤長老本の蘭亭序の趙跋があり、明の呉寛と周天球の跋を付している。元人の書にはまた明人の名家の題跋があり、元人の書の妙味をよく指摘している。趙の小楷高上大洞玉経には、文嘉の跋があり、趙の小楷を評して、「但、其体専宗元常。与公平時書、微有不同、而用筆之精、转折之妙、則無毫髮少異、蓋公於古人書法之佳者、無不做学、如元魏常侍沈叡所書魏定鼎碑、亦常訪之、謂其得鍾法可愛、則其于元常、固憐々矣。至晚年、乃專法二王、右軍黃庭經、子敬十三行之外、不雜他人一筆、所以深造自得、為一代書学之宗也」という。これは趙書の評としては、よく肯綮に当るものであり、題跋のもつ長所もこのような見識に触れることにあると言ふことができよう。また、趙孟頫が中峰和尚の作った勉学賦という長文を書いたものがある。趙の後跋に「中峰大和尚所作勉学賦、言言皆実、乃学人喫緊用力下功夫之法門也、豈止於老婆心切而已、学者於此玩誦而有得焉、於無奈勉强豁然開悟、則此賦亦属暗室之薪烛、迷途之郷導矣、因以中上人見示、於是乃疾書一過、至正元年三月廿二日弟子吳興趙孟頫記」とある。書がどのような機縁によって生み出されるかをよく知ることができる。この真蹟の書は趙の平生の実力のよくあらわれた快心の作品であろうと思われる。趙の天冠山題詠は、道士の祝丹陽が、天冠山図を示して賦詩を求め山中に刻石しようとしたので、そのために二十八首五言絶句で龍口巖から一線天までを詠じて贈った作

で、歎記に延祐二年六月廿四日松雪道人とある。さらにこの趙の詩に唱和して、おなじく各々二十八首を題詠した作が後に加えられている。それには袁楠、虞集、王士熙（継学）王金、林伝、呉全節ほか数名のものがああり、まことに壯観である。これほど規模の大きい書巻は未曾有といつてよいほどである。

法書といえは古人の尺牘を主とするのが習慣であったが、元人のものはきわめて多様であり、詩文のよいものを、書にかきあらわすことを樂しむ文人の遊戯的なものが多数に見られる。倪瓚（雲林）は文人画家として劃期的な人物であるが、詩をよくし、画賛にも詩を題することが行われたのは、雲林あたりから盛んになると言われるように、詩と書と画のいわゆる三絶の作が、このころから文人の間に流行してくる。この「珊瑚網」にも倪雲林の詩帖が多く収められているし、そのほか詩人で楽府を好んだ楊維禎（鉄崖）や張雨（貞居）などのように詩文をよくした人の書がここに多く収められている。張雨の詩帖の跋語を拾って見ると「張貞居以詩名海内、而翰墨尤為人所重、片縑尺楮、往々見之」（蘇人王行題）、また「貞居蚤学書于趙文敏公、後得茅山碑、其体遂変、故字画清適、有唐人風格、詩則出于蘇黃、而雜以己語、其意欲自為一家也」（高啓識）、また「貞居真人詩文字画、皆為本朝道品第一、雖獲片紙只字、猶為世人宝藏」（張紳）というように、諸名家がその書を推称している。

柯九思（丹丘）の石屏記は、その愛玩した一尺たらずの小さい石製の屏（硯屏のたぐい）の記事である。その文に、

「高昌正臣、博雅好古、其燕処之室、凡可以供清玩者、莫不畢具、石屏其一也、異哉、茲石方広僅咫尺、其文理燦然、有高深幽遠之思焉、絶頂渾厚者、如山如嶽、飛揚飄忽者、如煙如雲、横流奔激者、如江如河、断者若岸、泓者若潭、或如林麓之蓊鬱、或如禽魚之遊戯、使董北苑僧巨然復生、其破墨用筆、不是過矣、古之人遇物之異者、必書其冊、若斯屏之異、安得不為之書也、因命之日江山曉思、復書其背而刻之、至正二年夏四月望、奎章閣学士院鑒書博士、文林郎柯九思記」とあり、このちに、汪珂玉がまた一跋を加え、その時蔵した書鎮に、柯九思の銘文のあるものがあり、それをこの石屏とともに、書斎の玄賞に充てたならばどんなにかよろうかと思うことを記している。文房具の風流文雅は、宋末の趙希鵠の「洞天清祿集」などにも見えるところであるが、元人にもこのような賞玩のすがたがあることを目のあたりに想い浮べることができると。方寸鉄志は、呉門の朱珪（伯盛）が刻印をよくしたので、そのために張雨の名づけた方寸鉄の題名に因んで、諸家が題跋を寄せたものである。楊維禎、顧阿瑛など多くの人々の題跋が備っている。この記事は中国の篆刻の歴史の上からも重要な資料となるものであり、ただ書のみ

限らない。これらは、従来は尺牘や詩篇を主としていた書が、このような種々の内容のものに発展していったことを物語るものである。

清代になると、書画の著録は、鑑賞も精しくなり、内容もますます充実したものがあらわれてくる。康熙年間の帖学の盛行にもなつて、大きな著録が相ついであらわされる。その中では下永誉の「式古堂書画彙考」がもっともよく完備している。前朝以来の名蹟を従前の著録などをも併せ参考して集成したもので、一応の概観をなすのに適している。今この中の元代の部分を取りあげてみることにする。

卷十六 趙孟頫、趙雍、趙麟三人

卷十七 張伯淳以下馮思温に至る二十五人

卷十八 虞集以下王軫に至る二十五人

卷十九 張翥以下李訥に至る二十一人

釈家、釈劉順、釈梵琦二人

道家、呉全節、張雨二人

閻秀、管道昇一人

以上 計七十九人

卷二十、二十一、二十二は元人合卷

右のうち、掲載帖数の多いものを畧記すると次のとおりである。

趙孟頫約七十一、趙雍六、鮮于枢七、吾衍二、袁桷二、鄧文原四、郭昇三、康里巉々三、虞集十、**黄**縉二、歐陽玄五、柯九思二、鄭元祐四、朱德潤三、蘇大年二、饒介六、張翥三、錢惟善二、周伯琦三、楊維禎七、倪瓚十五、俞和三、胡悌二、沈右五、張雨十四、

以上が「式古堂書画彙考」に掲載した元書人の概数である。

この本の帖目の詳細を見れば、康熙年中の帖学家の見た元人の法書の概要を知ることができる。これによって、まず第一に注目されるのは、趙孟頫の作の圧倒的に多いことである。しかもその作は、小楷から、楷、行、草の各体にわたって、いずれの体をもよくしたあとが歴然としてゐる。王羲之、猷之の小楷の臨書、蘭亭序の臨書、各体の千字文などは、現有する作例もあり、その題跋に照しても精絶をきわめたものと思わ

れる。このほか、尺牘、詩帖、詞帖、古文や碑文、題跋等、多岐にわたっている。元人ならびに明人の題跋の加えられているものも多い。洛神賦、過秦論などは趙の名蹟として知られたもので、元人の題跋をとまなっている。尺牘では中峰和尚に与えた諸札は、停雲館法帖にも刻され、わが国にも同類のものがある（岩崎家藏）。妙巖寺碑記、膽巴帝師碑も著名なものである。もちろん趙氏の作は、これにとどまらず碑文などを拾えば、まだまだ多いであろう。趙の書は天資に出るものがあり、併せて学力によるものがあり、王羲之の書の黄庭経、王献之の洛神十三行の外、他人の一筆をも雑まじえなかったという。正伝の書をたつとび、異端の書の流入するのをこのまず、近体の俗風を雑まえることをもつともきらった。欧、褚以下は論ずるに足りないというきびしさで、ひたすら二王の典型に終始している。その高逸さと精到さにおいては何人の追隨も許さなかった。元代の書は趙に掩おほいつくされた感がある。ちょうど東晋の書をとりあげると、王羲之に集中して作品が見られるのと、同一の現象がここにも見られる。王の再来と言われるのも無理はない。たしかによほどの高い天分をもっていた人物であると言わねばならない。明の楊士奇が趙の臨蘭亭卷の跋に、「傲松雪書、幾三十年來、未能入室、懊々悩々、書法必見多則進、得眼入心、乃応之於手也、士奇再題」という。三十年学んでもその宝に入ることができず懊々悩々たりというは、おそらく、趙と同時の人々もひとしくこのように感じていたであろう。誰にも及ばない高い天分があった人と言うべきであろう。明の董其昌は、趙の技巧的な面を嫌ったが、それでも、楷の小楷だけは及ぶものがないことを認めている。

元一代の書は、あまりにも偉大な趙に掩おほわれて、この時代の多くの士大夫は趙を学び、また趙風の書をかいているのが大勢である。見識を備えて自ら一家を成している人でも、その中には結局、趙の気味を蔵しているのを免れなかった。この間の消息を、清の王澐がよく説いている。その題跋の一則に、

書法由唐入宋、魏晋風流、漸就漸薄、至趙子昂、始力振之、自子昂興、而世間作字人、無有無趙法者矣、卷中、鮮于伯幾、饒介之、非不欲各自立家、而子昂手意、宛然具在、周景遠（周馳）、為子昂知旧、尤為全体呈露、唯虞伯生（虞集）、天真爛然、無復摹擬之跡、然其氣息亦時々有之。蓋非直有元一代皆被子昂牢籠、明時中葉以上、猶未能擺脫文氏父子、仍不免在其彀中也。至董思白（董其昌）、始尽翻窠臼、自闢新規、然百餘年來、又被董氏牢籠矣」という。鮮于枢は趙とともに書名の高かった人物である。その書は草書を得意とし、点画の基礎は得ているが、意態の縦横に逸出するところがあり、饒介は、懷素を学んで、また草書の狂逸さにすぐれた。この二人にも子昂の手意があるとするのである。周

馳のように趙そっくりのものはともかく、虞集のように別に一家をなしているものはあっても、元代の大勢は趙風に掩われているという見方は、全般的にこのように考えてよいであろう。明中期の文徵明、後期の董其昌の書流が行われるのもたしかに同様の現象である、という。

元人の書に加えた題跋には元明の人のものが多い。元人の題跋のあるものは注目すべきであり、袁易、錢良右、虞集、張雨の作などにはそれが見られる。明人の題跋が多いのは、明人が元人の書を多く鑑賞し伝えていたからであろう。また、帖学者は概して尺牘や詩翰の行草体を好むので、古文篆隸の体には、元代にはかなり作者があることは「書史会要」にも見えるところであるが、式古堂にはわずかに一二にとどまる。吾衍、陸友がそれである。周伯琦なども篆書にすぐれた人であるが、ここではそうではない。実情はもっと篆隸は普及し学習されていたであろうと思われる。

この著録で、採録する帖数の多いものは、当然書の名家と見てほぼよいであろう。趙孟頫と、この時代の高い官職にあった士大夫たちは、おのずから書においても知名であり、それは一面には人をもって書をとるところにも因るであろう。元末で、趙風をもっともよく伝えたのは、上述のとおり、俞和をとるべきであろう。饒介、楊維禎、倪瓚、張雨などは元代の異色の書人であり、それは書とともに人物をもとらえて鑑賞すべきである。これらは書の塵俗性を逸脱することにおいて、また別の書境を開いているからである。

書の上では漢民族が優位にあったためでもあろうが、以上の中には異民族のものは色目人の康里巉々などの著名なものを除いては、ほとんど含まれていない。帖学派の法書の鑑賞の面では、漢民族の本筋のものを取っていると思われる。

おわりに元人合巻を二巻収めている。これは、一人の書の作品でなく、一門一派または同士の人々、また諸名家のものなどを、多数集めて、それを書巻の形式にして一つの作品として鑑賞するものであり、題詠、唱和、贈答、送別などの諸作を合巻したものである。宋代の著録ではこの形式のものはまだ見あたらず、元代になってあらわれる。元代の人の合成して作ったものがあるが、明代になってのちに集成したものもあるようである。こういう形式は文人の集りの上から生ずる遊戯性の加わったもので、風流文雅な性質を帯びている。詩人が詩社をつくって盟友が結集するのは、陳師道の江西詩社、吳涓の月泉吟社などがあり、宋末から元にかけてその例が見られる。このような文人の集社から生れる作も、この合巻の中に含まれている。このような鑑賞法は、またこの時代の新しい傾向の一つと言うことができるであろう。

康熙年中には、「式古堂書画彙考」のほかに、吳升の「大觀録」、顧復の「平生壯觀」などの著録があり、同様に元人の法書を収めている。

次いで乾隆年間に入ると、安岐の「墨緣彙觀」があり、これにも元人の法書を載せている。これらの法書の多くは、やがて乾隆の内府に入り、「石渠宝笈」に著録されることとなり、その中の名品は三希堂法帖に刻入される。これによって、原本のすがたを墨拓ながらも見る事ができる。現在、台北の故宮博物院の収蔵品は、「故宮歴代法書全集」に収められているので、原蹟はこれによってさらに明瞭な写真版として見ることが出来る。これらの中にはさきの著録に収められたものが多数あって、原蹟を確かめて鑑賞することが出来るわけである。ここでは、元代の法書の大体を得てその特色を把握することが目的であり、一応の段階まで達したので、次に元代の書論について見てゆきたいと思う。

元代の書論

元代の書の理論は、元人の書の作品と書風の傾向からも導き出すことができるが、また、文人学者たちの記した題跋からも考えることができる。ただ、元代は前代ほど題跋の伝わるものが多くはなく、宋代に見られたような、単独の某々題跋という形式の著述は、ほとんどないので、この方面からも書を論じた記述を豊富に見出すことはできない。この時代には概して保守的で伝統的な書が行われたので、古典の書の学習を目標とした指導のための書論がいくつか著わされている。李溥光の「雪庵字要」、鄭杓の「衍極」、盛照明の「法書攷」、陳繹曾の「翰林要訣」の四種が主要なものである。ここでその一々について見ることにする。

李溥光の「雪庵字要」一卷、涵芬楼秘笈第九集所収本、著者の李溥光は、字は玄暉、雪庵と号した。僧侶で、俗姓は李氏という。大同（江西）の出身。元朝に仕えて、官は昭文館大学士に至った。玄悟大師の号（圓悟が正しいか）を賜わった。詩をつくるに、冲澹粹美であり、真行草の書を善くし、とりわけ大字を工みにし、国朝の宮中の扁額はみなその書するところであった（書史会要）。至正大徳の間、楷書大字で世に名があった（陳繼儒、書画史・至正は至元の誤りであろう）。「雪庵字様」は大字の書を学ぶ人のために作られたものである。その内容は目録によると捺襟字原、大字説、大字評、把筆歌、用筆歌、把布歌、用布歌、捺襟歌、捺襟六法歌、八法歌、三十二形勢歌、八善歌、八美歌、八忌歌、八病歌、去取歌、永字八法説、把筆法図、用布法図、三十二形勢図、八病図、十六字格図の二十二条がある。把筆法図以下は図をもって示している。この書の要点は大字説のところに述べられている。それによると、かれははじめ陳宏道という人に書法を学び、布衣から翰林院に入った。書は規矩が大切で、それには先づ永字八法を学び、それからち変化二十四法（永字八法の基本点画の二十四の応用体）を学ぶ。この二

つに成熟すれば、十萬億の字法は皆その中に在る、という。大字を学ぶには、小楷を学んで、正しい病弊のない書法を体得してのち次第に大字に進むのである。古人では顔真卿、柳公権を第一とし、歐陽詢がこれに次ぐ。大字には王者の威嚴のある風格がなければならず、筋骨神氣の蒼勁清古なのをよいとする、という。技法としては大字を書くのに、むかし張旭が衣襟を拵おろんで大字をかいたのに倣って、布を用いているのがめずらしい説である。至大元年の年記と、圓悟慈慧禪師資善大夫昭文館大學士李浦光雪庵書於翰林院文會軒の署名がある。この著はおそらく上進したものである。至大元年（一三〇八）、は元武宗の年号で、元初に近いころの本である。今本には前に、明の永樂九年（一四一一）詹恩と、宣德四年（一四二九）葉勝の序があり、巻後に永樂八年（一四一〇）詹恩と成化十七年（一四八二）俞洪の両跋がある。詹氏の序に大字の系列を説いて、唐には張旭、顔真卿があり、宋には張即之、朱晦庵（朱熹）、蔡君謨（蔡襄）、米元章（米芾）があり（順序は原文のまま）、金には趙秉文があり、元には李雪庵があり、聖朝（明）では詹孟舉（詹希原）数人のみ、と言っている。張旭が大字の書家として出てくるのは、かれが永字八法を伝えたからで、この本の首に天寶二年の張旭の字説をのせている。書体には古くから署書があり、題署のために大字をかく一体があり、各代にその書法を承けついで統緒のあることがわかる。この流れは明代に及んで、景泰二年（一四五二）李淳が、僧楚章から李溥光の永字八法変化三十二勢を授かり、さらに大字結構八十四法をあらわして上進している。清の馮武の「書法正伝」には、李溥光の「永字八法」と李淳の「大字結構は八十四法」を載せている。大字結構は文字の間架結構を字形別に整理したもので、初心の学習には必須のものである。詹孟舉（希原）とともに明初に名のあったものに姜立綱があり、李雪庵の大字の法を受けて、同じく永字八法を基本として、永字八法の応用の点画の七十二筆勢を説き、また間架結構の諸式を示している。日本で、寛文、元祿のころに流行した「内閣秘伝字府」およびその系統の指導書は、姜の説から出ている。これもさかのぼれば李雪庵に出ると言ってもよい。享保二十年刊「中書楷訣」は姜立綱の著書として覆刊されたもので、原著には嘉靖八年（一五二九）三月陳種の跋がある。これもおなじく永字八法と間架結構を图示した著書であり、中書格とよばれて、書の学習の基本として日本にも流布したものである。中書というのは、中書省のことで、詔令などを清書する中書舎人の官にあった人たちが楷書をよくし、その書法が世の学習者の基本となったからである。

鄭杓の「衍極」五卷、鄭杓は、字は子経といい、羅源（福建）の人。元の泰定中（一三二四—一三二七）に南安県教諭となった。陳旅（字は衆仲、莆田の人、虞集に文才をみとめられて推薦され、官は国子監丞に至った人）と交遊した。「衍極」は五篇より成り、至朴、書要、造書、

古学、天五の各篇に分たれるが、内容は必ずしも整理された秩序正しい著述ではない。至朴篇は書の源流と、諸名家の伝統をとき、八卦書契に始まり宋の蔡襄で終っている。書要篇は、まず、六書の説をとき、古文篆隸雜体等の各体の技巧と鑑賞の理論をといっている。その間に、碑帖の真偽を弁別する諸条があり、黄庭経、洛神賦を偽とし、張旭、顔真卿を評して、歐、虞、褚、薛の書の疲沓を一掃したというなど変った説を立てている。造書篇は、書法の生成の原理を古代から説き起し、ついで、古今の書品論をとき、孫過庭の書譜、姜夔の續書譜、宣和書譜、蘭亭考、黄伯思の東觀余論などに対する批判の語をなしている。この批判は大局を論じたものではなく、部分的な問題をとり上げて疑問を投げかけているのであるが、その一つ一つはみなかなり手厳しい批判である。また、古碑を論じた数条がある。古学篇は、はじめに魏晉以後唐に至る書論を雜記し、署書、銘石書をとき、ついで晉唐宋の諸家の書を論じている。要するにかれの取るところは、張芝、鍾繇、王羲之から、唐の張旭、顔真卿、李陽氷、宋では蔡襄までとするのであって、絶対的な古典主義の立場をとっている。ただ、その間に伝説的な虚構を容認して論拠とするところが随所にあるのは新鮮とは言えない点もある。天五篇では、執筆を論ずるほかは、書体、書法、書論が雜出している。全篇には劉有定（字は能静、号原範、莆田の人）の注がついているので原文を補綴するところが多い。はじめに延祐七年（一三二〇）の李齊（仲思）の序文がある。劉有定の序が至治二年（一三二二）に成っているので、この本の成立の年代をほぼ推定することができる。今、行われているのは陸心源の十万卷樓叢書本であるが、別本には学書次第之図と書法流傳之図の二図がついているという。この二図は佩文齋書畫譜卷四に収められている。学書次第之図は、法帖を学ぶとき、年令に応じて法帖が指定されることを示したもので、大中小の楷書、行、草、篆、古文、八分の手本を八歳から二十五歳までに配している。書法流傳之図は、漢の蔡邕にはじまり、魏晉南北朝を経て唐に及ぶまでの書法の伝授の系譜を图示したものである。これも先の図とともに原著にあったものと思われる。これを見ると、書が伝授形式で師匠から弟子に教えられたという見方で排列されている。従ってその目標は漢魏晉にあり、その古法を守った唐と、宋では蔡襄までを限界とし、その理論はもちろん古典に行われる書の理論に出るものであることが考えられる。この系譜に張旭や顔真卿などの、今日の書道史では革新派と言われる書人があり、しかも、張旭などは、多くの門弟を擁して、伝授書道の大家の地位を占めている。これは現在の書道史では、これを革新とよんでいるが、中国の書論ではそういう区分をすることはなく新しい考えで新しい書風を備えた人もすべて伝統の系譜の中において見るわけで、系譜はあくまで伝統一すじであり、革新派が伝統に対抗するような考え方にしないのが普通である。

盛照明の「法書攷」八卷、著者の盛照明は、出身は曲鮮（龜茲）の人で、のち予章に住んでいた。真面目な勉学家で、学問も広く才能もあり、書も工みで、六国の書に通じていたという。「法書攷」は書学の文献をよく通読し、よく整理して編成したもので、至正甲申四年（一三四四）進上して御覧に供し、禁中に蔵せられたという、（書史会要）。上海涵芬楼景印鈔本（四部叢刊統編）、曹棟亭揚州詩局刊十二種の中にも収められている。陸氏十万卷楼叢書本もある。内容は、書譜、字源、筆法、図訣、形勢、風神、工用、附録の八卷に分たれる。

書譜はさらに集評と弁古とに分れ、集評は古人の書論に基いて上古から唐代までの書人を上中下三品に品第している。弁古は、まず古文篆隸の古石刻、碑およびその参考文献を列举し、次に、真書、行書、草書の碑帖をかかげ、真偽優劣の評を加えて、のちに参考文献を付記している。学書者の習学し必修すべきものを示したのである。字源は梵音と華文とに分っている。梵音は中国の文字の創始者の倉頡と並ぶものとして梵すなわち光音天人を取りあげたのである。これには梵音の声韻と字母を解説している。華文は漢の許慎の「説文解字」の序と唐の張懷瓘の「十体書断」をあげて解説を加えている。筆法は、操執と揮運とに分ち、古人の説を多く引用している。伝授書道の弊害のある記事もある。元代の他の書論家と同じように張旭、懷素、顔真卿の革新派と伝統派の書の区分をせずに論じている。図訣は八法と偏傍とに分ち、永字八法と書の偏傍の技法を説いている。形勢は、布置と肥瘦とに分ち、布置は結体の疎密を論じ、肥瘦は骨格についての肥瘦を説いたものである。風神は、情性と遅速と方円とに分ち、工用は宗学と臨摹と丹墨とに分ち、学書の目標と、古法帖の臨摹と用墨の法について論じ、附録には、印章と押署跋尾について説いている。曹棟亭の刊本には、首に元の虞集と歐陽玄と掲侯斯の三序がある。末尾には清の朱彝尊の跋がある。著者の盛氏は西域の龜茲の出身のいわゆる色目人で、しかも書学の素養が深く、篇目もよく整い、文献にもよく通じている点は称すべきところで朱氏跋にも、「その文は約、その旨は該、意わざりき、九州の外に乃ちこの人有らんとは」と感服している。書道の概説書としては見るべき著述であり、書を全般的にとらえて的確な判断を下していることは、この時代の保守的な傾向によく迎合されたものと思われる。創作芸術の書ではなく、伝統的に書法を学習してゆく一般の動向に慮るものであったと考えてよいであろう。

盛照明には、別に絵画に関して「図画攷」の著がある。（上海涵芬楼景印伝録常熟瞿氏鉄琴銅劍楼藏鈔本）。これによって書画両方面において見識のあった人物であることを付記する。

陳繹曾「翰林要訣」、陳繹曾是、字は伯敷、処州（浙江）の人、進士となり、官は国子助教に至った人。「翰林要訣」は一巻より成り、内容

は、執筆法、血法、骨法、筋法、肉法、平法、直法、員法、方法、分布法、変法、法書の十二条に分っている。美術叢書本、書法正伝本その他、「書史会要」、王世貞の「古今法書苑」にも部分的に収録され、「佩文齋書画譜」にもある。各本字句にかなり異同がある。これは、伝授書道により口述で師授された記録から出たために伝鈔によって字句の異同が多いのではないか。書法正伝本には、目録の末尾に至正二年（一三四二）冬、朱昇の題記があり、この本の成立年代がわかる。内容の示すとおり書の技法を主とした指導書であり、当時ひろく用いられたものと思われる。後世、馮武の「書法正伝」に李雪庵の著書などとともに第一冊に採用しているのを見ても、その普及性が察せられる。

このほかにもう一つ「書法三昧」がある。同じく書の技法の基本書である。これも「書法正伝」と「佩文齋書画譜」に収められている。明初の胡翰の序文にこれは鮮于枢、趙孟頫、康里巎巎が常に宝愛し、周伯琦もこれを見たと伝えられるもので、このような通俗な書道の学習のための指導書が多く行われていたことがわかる。このほかにもなお二、三この種のものがあるが、重要なものは上記の四種である。

以上の諸書を通じて言うことは、元代の書道は、保守性が強く、伝統の書道を守るために、その伝授による書法を重んじて、一般に書論としてはこのような書法の技術面の濃厚な参考書が多く行われた。反面において、北宋の東坡、山谷、海岳らの称えた創作的な新しい書論は影をひそめて、ついに表面にはほとんど現われることはなかった。顔真卿や張旭、懷素は取りあげられても、その新鮮な創作性をとらえるのではなく、伝統書道の堅固な城郭の中においてそれを系譜の中の書人として見ている。東坡の人間性を発露した自由な境地や山谷の俗塵から脱した超越性や、米芾の平淡天真の妙など、書道の核心にふれる精神性を直接にとらえることはなく。書道の全般を概説することはでき、書法の精巧な道を開くことには、大きな努力が払われて、やがて次の明代の前半期の古典性に役立つところは少くなかった点は、一応の評価はすべきであろう。

結 び

元代の書人は、蒙古人と色目人と漢人とに分れるが、書をよくしたものは、いずれにもあつたけれども、結局は後世、漢人の書家が多く取りあげられることになった。それは書の文化の担当者か歴史的にも漢人が優位であったからである。元代にはとくに趙孟頫という天才的な古典作家が出現し、上下の信頼を得たために、その大勢もこの方向に傾いていった。趙氏一家をはじめ、趙の門下、また趙の書風を慕うものは、士大

夫の大半を占めている。趙と対抗しえたのは鮮于枢、鄧文原であり、虞集、揭傒斯などみな一家をなしながらも、結局はすべて趙風の傘下に集った感がある。元末の俞和にいたるまで趙風は永くこの時代を蔽うていた。趙が各体をよくしたのは天資に出るであろうが、他の多くは一体に秀でて、各体に通達することでは趙には及ばなかったようである。鮮于枢の草書、康里子山の章草など草体に特色を出して一家を成すものがあるのもこの時代の一特色である。元時代も後半期に入り、趙の没してのち、文芸家の中に、新しい気風が起った。この間に出了張雨、饒介、楊維禎、倪瓚などは、古典から出ていると言われながらも、もはや趙風の一語で言い尽くすことのできない境界をもっている。倪の画は米芾につながるし、張雨は米芾を崇敬してその小伝を書いているのを見ても、その系列のすでに異数であることを察することができよう。以上のようなわけで書論では、趙の書と平行する絶対的に晋唐に終始する古典論が大きく巾をとっている。題跋のたぐいに、この種の書論のよいものがある。郝經、趙孟頫、袁桷、虞集、宋本、袁裒など、みなよい書論をのこしている。郝經が、奇を以って正となすという明の董其昌のしばしば用いる言葉を出しているのは先覚者として注目されてよい。袁裒の書道の歴史的な大観も、この時代としてはめずらしい見識である。宋本にもめずらしい個性論があるなど、各様の書論が見られる。一般には伝授書道の通俗な学習指導のための書論が、広く行われていた。それは一面には漢字を知らない異民族の教養のために行われたとも言えるが、文学者の見識の高いものは必ずしもこれには捕われてはいなかったであろう。このような永字八法や大字の流布した反面に、文字の学問に立つて古文篆隸をよくしたのもかなりの数に上るが、後世の帖学派の人々の観賞面にはとかく尺牘や行草の詩翰が尊重されるので、広くは伝わらなかったようである。結局、元代に求められるものは趙を第一としなければならぬが、もう一つは、趙の古典主義の中から、元の後半期のころ次第に起こってきた文人の新鮮で高逸な風気が萌して、それが明の前半期の古典性のうちに潜在力となって、やがてのちの文人芸術につながるものがあるということである。